

Ver. 2019-07-04

自決死

宮下英明 著

自決死

本書について

本書は、

<http://m-ac.jp/>

のサイトで書き下ろしている『自決死』を PDF 文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

目次

| | |
|----------------------|----|
| 0 導入 | 1 |
| はじめに | 2 |
| 1 延命社会 | 7 |
| 1.0 要旨 | 8 |
| 1.1 延命産業 | 10 |
| 1.2 延命イデオロギー | 11 |
| 1.3 延命指導責任 | 12 |
| 1.4 無言マジョリティー | 13 |
| 2 死の類型学 | 15 |
| 2.0 要旨 | 16 |
| 2.1 衰弱死——〈体の自壊〉 | 17 |
| 2.2 事故死——〈体を他から壊される〉 | 19 |
| 2.3 自殺——〈体を自ら壊す〉 | 20 |
| 3 「自決死」立論 | 23 |
| 3.0 要旨 | 24 |
| 3.1 煩悩：〈わたし〉を残す | 25 |
| 3.1.0 要旨 | 26 |
| 3.1.1 弟子 | 27 |
| 3.1.2 作品 | 28 |
| 3.1.3 老害 | 29 |
| 3.2 常住死身 | 30 |
| 3.2.1 「常住死身」 | 31 |
| 3.2.2 「死ぬことと見つけたら」 | 34 |
| 3.2.3 作品終結 | 36 |
| 3.3 自決死 | 38 |
| 3.3.1 自然死 | 39 |

| | |
|----------------|----|
| 3.3.2 「自決死」 | 41 |
| 3.3.3 往生道 | 42 |
| 3.4 備考：西部邁「自裁」 | 43 |
| 3.4.1 「自裁」テキスト | 44 |
| 3.4.2 対比「自裁」 | 48 |
| 4 閉じ | 51 |
| おわりに | 52 |

0 導入

はじめに

はじめに

生き物には盛りの時期がある。

この後は、自壊と死である。

この死には、つぎの二つの場合がある。

a. 自壊から死へが、直ぐ

(例：産卵後の鮭の死)

b. 自壊が短時間でなく、その間の弱体において他の生き物の餌食になる

人は後者の場合であり、行き倒れて狼に食われるとか、老人がウィルス性肺炎やO157で死にやすいとかは、この例である。

しかしここに、延命技術の進歩があって、簡単に死なないようになった。人はずっと長生きできるようになった。

自壊はカラダの機能劣化の進行ことであるが、これには脳機能劣化の進行が含まれる。

長生きするとは、脳機能劣化の進行を生きるということである。

脳機能劣化を、今日は「認知症」と呼んでいる。

これは、直接的な物言いを憚った表現である。

直接的な物言いは、痴呆化ないし白痴化である。

「白痴」のことばは、既に辞書から抹消されている。

「痴呆」のことばも、じきに辞書から抹消されることになる。

いまの社会は、ことば狩りが正義になるからである。

「認知症」のことばは、言うまでもなくミスリーディングである。

長生きによる脳機能劣化は、＜健常＞の逆の＜障害＞ではないからである。

長生きによる脳機能劣化は、長生きのカラダの＜健常＞である。

そこで本論考は、＜障害＞用語の「認知症」のことばを却け、「痴呆」を＜健常＞用語として復権させこれをを用いるとする。

これは世間に反抗する体^{てい}になってしまうが、反抗は本論考の趣意ではない。

さて、ひとは、自分の将来が痴呆で生き長らうになることを願わない。

「願わない」はまだ消極的な物言いである。

「厭う」と言うのが近い。

しかし現代社会では、ひとは痴呆で生き長らうになっていく。

生き長らうが断たれる契機^{てい}が無いからである。

この現前に対し幸福云々を論じるのは、ナンセンスである。

実際それは、「ゾンビは幸福か不幸か」を論じるようなものである。

この現前を論じる仕方は、生態学である。

系は自己組織化する。

一つの流れには、これに反逆する流れが起こる。

＜痴呆で生き長らう＞の流れが安定に見える時は、これの攪乱^{てい}が起きる時である。

その攪乱の^{てい}体は、「自決死」ということになる。
本論考は、これを考えてみようとする。

1 延命社会

1.0 要旨

1.1 延命産業

1.2 延命イデオロギー

1.3 延命指導責任

1.4 無言マジョリティー

1.0 要旨

現代は、延命技術が持たれた時代である。

延命技術が日々開発される時代である。

延命技術を使うことが、巨大産業になる。

よって延命技術を使うことが、正義になる。

そしていまは、コンプライアンスの時代である。

正義を生業にする者は、延命を唱えねばならない。

延命しなかった者を出してしまうことが己の責任問題として追及される立場の者は、延命対策に一生懸命な自分の姿を執拗にアピールしていかねばならない。

こうして現代は、ひとが延命に誘導される時代である。

年寄りとは、いつまでも生きるようになる。

年をとるとはカラダが劣化することであり、この劣化にはアタマの劣化が含まれる。

アタマの劣化とは、即ち痴呆化である。

いつまでも生きるとは、痴呆で生きるということである。

こうして現代は、ひとがディレンマに立たされる時代である。

延命は正義であるから、逆らうものではない。

延命オリエンテーションに対し、ひとは無言を立場にする。

実際、無言がマジョリティーを形成する。

1.1 延命産業

技術が持たれると、それが何であれ、ひとは「これで一儲け」を考える。
実際、これが商品経済である。
商品経済とはこういうものである。

商品経済は、自律的な運動系である。
ひとは、このダイナミクスに呑み込まれるという形でしか生きられない。
商品経済の産業は、産業のための産業である。
ひとは、＜産業のための産業＞に呑み込まれて生きる。

老人の医療・介護は、いま最も大きな産業になっている。
この産業——「延命産業」——は、商品経済の産業である。
これは既に＜産業のための産業＞として回転している。
ひとはただ、この産業に加担するように生きねばならない。

むかしのことばに、「消費は美德」というのがある。
そのロジックは：

消費をしないと、経済が回らない
経済が回らないとは、社会が成り立たないということ
社会を成り立たなくさせるのは、悪徳である
よって消費は美德である。

「延命」は、この「消費」のうちである。
老人は、延命が美德になる。

1.2 延命イデオロギー

社会の主流は、これに正のフィードバックがかかる。
特に、主流を正義に定めるイデオロギーが醸成される。
実際、正義とはこのようなものである。——これ以上でも以下でもない。
すべては系のダイナミクスの中にある。

かくして、延命産業が大産業になっているこの社会は、延命が正義の社会である。
延命プロパガンダに異論を立てることは、個々が自ら憚るところとなる。

1.3 延命指導責任

今日、延命をひとに指導できる立場の者は、この指導をしないと責任を問われるようになっている。

彼らは、延命指導が成り立つ場面では悉く指導を発する者になる。

行政機関、学校、研究機関等々、そして彼らの言を伝える立場のメディアがそれである。

かくして、メディアはやたらうるさくなった。

気温が高くなる日は、テレビ画面に「冷房しろ・水分をとれ」の表示の枠がかかる。

子ども扱いだが、子ども扱いしないでしかられるよりは子ども扱いする方がよいというわけである。

——《どこもかしこもコンプライアンス》の一事。

1.4 無言マジョリティー

世論は、報道マイクでは拾えない。

大衆は、無言を択るからである。

ことばにできるのは、タテマエ（偽善＝単純）である。

ホンネ（実際＝複雑）は、ことばにできない。

報道マイクに応じるのは、タテマエ論が好きな者である。

タテマエ論を言うことは、善行である。

この場合の〈大衆は無言を択る〉は、善行一般に当てはまる。

ひとは、匿名性が保たれるときは、善行に背を向ける。

かくして、選挙投票率はつねに低調である。

避難指示で避難所に人が集まるのは、地域の縛りの強いところである。

大衆は、実際を捨てて偽善に向かうようなことはしないということである。

表現者がやるような偽悪にも向かわない。

かくして、無言になるのである。

この場合の無言は、インテリジェンスである。

2 死の類型学

2.0 要旨

2.1 衰弱死——〈体の自壊〉

2.2 事故死——〈体を他から壊される〉

2.3 自殺——〈体を自ら壊す〉

2.0 要旨

「自決死」定位のためのいわば座標軸構築として、「死の類型学」をここで立てておく。

死は、体が壊れて至るものである。

よって、死の類型——機能的類型——は、体の壊れ方の類型に代えられる。

体の壊れ方を、つぎの枠組で見るとする：

- a. 体の自壊
- b. 体を他から壊される
- c. 体を自ら壊す

これに対応する死は、それぞれ「衰弱死」「事故死」「自殺」と呼ばれる。

強調するが、これは枠組であって分類ではない。

自殺にも、自分を他者に殺させるというのがある。

また例えば「戦死」は、<殺られる>だから「事故死」であり、自ら死地に向かっている点では「自殺」である。

2.1 衰弱死——<体の自壊>

組織の成長は、拡大と精密化である。

大きくなり精密化することは、新陳代謝が難しくなることであり、環境変化への適応が難しくなることである。

<成長>は、<体制疲労>のステージに移行する。

組織は、体制疲労で死ぬ。

どんな組織も、死が定めである。

生物にはまた、自壊がプログラムされている。

生物は繁殖を自己目的化した存在であり、盛りを過ぎた生は無意味である。

盛りを過ぎたら速やかに壊れて死ぬことは、生物の含意である。

カラダの自壊ダイナミクス——上の2つ——による死を、「衰弱死」という。

「衰弱」は、他から助けられないと生きられない状態である。

衰弱期間が長ければ、衰弱死するより前に、餓死とか他の生き物の餌食になるとかで死ぬことになる。

したがって、衰弱死を得られる生物は社会性生物である。

人はこの場合になる。

しかし、社会性生物においても、純粋な「衰弱死」は存在しないと見るべきである。

衰弱の内容には免疫力低下があり、免疫力が低下したカラダはたちまち

寄生性生物の餌食になる。

「衰弱死」は、せいぜい人間がつくる無菌室の中にしかないというわけである。

2.2 事故死——〈体を他から壊される〉

生物に衰弱死は存在しないと述べた。

生物の死は、事故死である。

人間は、事故死に加えて、他の生物にはない自殺死がある。

自殺が他の生物にないのは、自殺は「自殺」の概念がもたれていてこそものだからである。

「自殺」の概念は、学習で得る。

この学習は、人間以外の生物には存在しない。

人の事故死には、つぎのものがある：

- ・他の生物の餌食になって死ぬ
- ・自然災害で死ぬ
- ・人に加害されて死ぬ
- ・〈生き死に〉の勝負をして、これに負けて死ぬ

2.3 自殺——〈体を自ら壊す〉

本論考の「自決死」のことばは、《他に適当な言い回しが見つからないまま、これになっている》というものである。

このことばの問題点は、ひとはこれを「自殺」の意味にとるだろうということである。

「自決死」は「自殺」ではない。

そこで「自殺」とは何かの押さえをやってておくとする。

「自殺」には、つぎのものがある：

- (1) 苦悩から逃れる自殺
- (2) 苦痛から逃れる自殺
- (3) 戦術としての自殺
- (4) 表現としての自殺

(1), (2) については改めて解説するまでもない。

(3) は、「特攻隊」や「自爆テロ」が例になるものである。

以下、(4) について解説する。

「表現としての自殺」としてここで立てる自殺は、「自分は大衆とは違う」を表現しようとして行う自殺である。

大衆は自殺しないので、自殺をすれば「自分は大衆とは違う」になるわけである。

・「自分は死ぬのがこわくないぞ」の自殺。

——「大衆は臆病、自分は勇気ある者」を自己表現にする。

・「大人は汚い、自分は大人にならない」の自殺。

・「大衆の生き方を自分とはとれない」の自殺。(「[巖頭之感](#)」)

「自分は大衆とは違う」は、体制批判を含蓄している。

実際、体制に抗議する自殺がある。(「[フランシーヌの場合](#)」)

「体制抗議の自殺」を立てるとき、「表現としての自殺」と「戦術としての自殺」の違いがはっきりしなくなる。

実際、体制を〈大衆から遊離したいまや敵〉と定めるときの体制抗議の自殺は、「戦術としての自殺」である。

ここでは、「表現としての自殺」と「戦術としての自殺」を、匿名性を規準にして分けておく。——「表現としての自殺」の「表現」は自己表現であり、〈人知れず〉だと意味がない。

特攻隊の「自殺」は、匿名であるから、「戦術としての自殺」である。

自爆テロの自殺は、匿名なら「戦術としての自殺」だが、英雄として名を残そうというものだったら「表現としての自殺」になる。

「表現としての自殺」は、「これ見よがし」の自殺である。

芝居がけると嫌味になる。

3 「自決死」立論

3.0 要旨

3.1 煩悩：〈わたし〉を残す

3.2 常住死身

3.3 自決死

3.4 備考：西部邁「自裁」

3.0 要旨

「自決死」は、「老衰」を文脈にして立てようとするものである。

延命社会では、老衰死は痴呆化を含意する：

老衰は、カラダの自壊である。

自壊には、アタマの自壊が含まれる。

アタマの自壊が、「痴呆化」である。

老衰死は、アタマの自壊がひどくなる前に来るか、ひどくなってしまった後に来るかである。

延命社会では、ひどくなってしまった後に来る。

ひとが痴呆化を厭うのは、〈わたし〉の喪失をこれに見るからである。

ひとは〈わたし〉として人生を終えたい。

〈わたし〉でなくなった生き物が死ぬという終わり方は、厭うのである。

実際のところ、〈わたし〉の喪失は程度問題である。

老衰は、〈わたし〉の喪失を含む。

ただ、当人がその喪失に気づけないだけである。

「自決死」立論は、「延命を却ける」が命題になり得ないか考えてみようというものである。

実際、〈痴呆化経由の老衰死〉を実現するのが延命なのであるから、〈痴呆化経由の老衰死〉を免れる方法は《延命を却ける》である。

3.1 煩悩：〈わたし〉を残す

3.1.0 要旨

3.1.1 弟子

3.1.2 作品

3.1.3 老害

3.1.0 要旨

生物は〈わたし〉の繁殖を自己目的化した存在である。
生物は、繁殖行為が成るとき安定であり、成らないとき不安定である。

人間もこれである。
これ以上でも以下でもない。
ただし人間は、「繁殖」の内容を拡げた。

生物一般の「繁殖」は、「子どもをつくって〈わたし〉を継がせる」である。
子どもの生物学的意味は、「〈わたし〉を残す」である。
ここで人間は、〈わたし〉を残す仕方として、〈弟子〉とか〈作品〉という形態を開発した。

生物において現役であるとは、繁殖ができることである。
よって、〈弟子〉〈作品〉が繁殖になるということは、〈弟子〉とか〈作品〉が成っているうちは現役だということである。
かくして、年寄りも現役であり得ることになった。

3.1.1 弟子

弟子は、〈わたし〉を残すためのものである。
〈わたし〉を残すことが成らない弟子は、「不肖の弟子」である。

翻って、〈わたし〉が意味をなさない分野は、師弟関係の育たない分野である。
生徒はそこでは、弟子ではなく、同輩になる。

3.1.2 作品

ひとがせっせと作品を出すのは、〈わたし〉を残そうとしてである。

ひとはアート作品を「表現」と呼ぶ。

このことばはミスリーディングである。

このことばを受け取った者は、「何を表現しているのだろう」の構えで作品に対するからである。

作品は何かの表現ではない。

作者は何かを表現しようとする者ではない。

作品は、そこにあるがままのものである。（「何も隠されてはいない。」）

作品は、作者の存在主張である。

作品のメッセージは、「わたしはこれを作る者だ」である。

アート作品の鑑賞は、作品の個性の鑑賞である。

類型的か独創的か、凡庸か非凡か、である。

ひとを圧倒する作品は、独創・非凡がひとを圧倒するのである。

翻って、アート作品を鑑賞する者は、〈経験値〉である。

鑑賞には、独創・非凡がわからない経験値がする鑑賞と、独創・非凡がわかる経験値がする鑑賞がある。

3.1.3 老害

年寄りが現役でいられるようになったところは、年寄りがいつまでも退役しようとしなくていいところになる。

宗教界、芸能界、学界のようなく師—弟子—組織になるところは、年寄りがいつまでも退役しないところになる。

美術、音楽、文芸のような表現シーンは、年寄りがいつまでも活動しているところになる

〈自分はまだ現役である〉——〈弟子がいる〉〈創作している〉——は、当人がそのつもりでいるということである。

つもりは、たいてい勘違いである。

そして年をとるとは、自分の勘違いがわからなくなるということである。

役取りは競争であるから、年寄りがいつまでも退役しようとしなくていい社会は、若い者に不利な社会である。

この様を「老害」という。

今日のいちばんの老害は、政治が年寄りに阿る政治おもねになっていることである。

政治は、選挙民多数派に阿る。

少子高齢社会は、政治が年寄りに阿る社会である。

3.2 常住死身

3.2.1 「常住死身」

3.2.2 「死ぬことと見つけたら」

3.2.3 作品終結

3.2.1 「常住死身」

山本常朝『葉隠』聞書第 1-002

道は死ぬ事、毎朝毎夕常住死身になれ、家職を仕果す
一、武士道といふは、死ぬ事と見附けたり。

二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片附くばかり也。

別に仔細なし。

胸据わって進む也。

圖に当たらずは犬死などといふ事は、上方風の打上がりたる武
道なるべし。

二つ二つの場にて圖に当たるやうにする事は及ばざる事也。

我人、生くる方が好き也。多分好きの方に理が附くべし。

若し圖にはづれて生きたらば腰抜け也。

この境危うき也。

圖にはづれて死にたらば、犬死氣違也。恥にあらず。

これが武道に丈夫也。

毎朝毎夕、改めては死に、改めては死に、常住死身なりて居る
時は、武道に自由を得、一生落度無く、家職を仕果すべき也。

武士は<死ぬか生きるか>の勝負をやるのが仕事である。

死はいつも身近にあるから、「常住死身」を構えとすることになる。

さて、誰にとっても死は不意のものである。

不意が嫌なら、備えることになる。

よって「常住死身」は、現代人にもモットーにはなりそうである。

「常住死身」は、「二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片附くばかり」がこれの実践形だという。

延命を択ぶと外れるというのが、その理である。

ここでは、「腰抜け」になることが<外れ>である。

武士は<死ぬか生きるか>の勝負をやるのが仕事であるから、「腰抜け」と定められることは武士をやれなくなるということである。

ここでの「腰抜け」の意味は現代人が考えるものよりはるかに重いということに、注意せよ。

「二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片附くばかり」も、現代に当てはまるところはある。

実際、現代社会には延命を択んでおかしくしていることが、いろいろある。

本末転倒が生じるのである。

この本末転倒は、正のフィードバックが働いて、ますます度外れたものになっていく。

例えば、安全指向。

安全は生活のための安全であるが、安全のための生活になる。――安全指導に従わない者は<不良分子>である。

つぎも、言っていることは「延命を択ぶと外れる」である：

良寛

災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。

死ぬる時節には死ぬがよく候。

是はこれ災難をのがるる妙法にて候。

ただし、「延命を択ばない」は、誰にも当たるというものではない。

特に、若い者には当たらないとしておくのが無難である。

本論者がここで論考しようとするのは、あくまでも年寄りの場合の「延命を択ばない」である。

3.2.2 「死ぬことと見つけたり」

「道は死ぬ事、毎朝毎夕常住死身になれ、家職を仕果す
一、武士道といふは、死ぬ事と見附けたり。」

(山本常朝『葉隠』聞書第 1-002)

理は、個・状況依存である。

「死ぬことと見つけたり」の理は、いまの時代には当たらない。

これは、「常住死身」から別けておくことになる。

いちおう念のため、このことをここで押さえておく。

「死ぬことと見つけたり」の「死」は、鮭の産卵の死と同型である。

この死は、《死＝作品》の死である。

〈わたし〉を残すことは死ぬことである。

この「〈わたし〉を残す」は、「名を残す」である。

「功名」である。

これは、死に様で決せられる。

死に様が拙いと、これまでやってきたことすべてが無になる。

この理は、いまの時代には当たらない。

この社会は情報社会である。

情報社会は、すべてが相対化され、すべてが一瞬に忘れられる。

情報の新陳代謝が激しいのである。

この社会では、「名」は何ものでもない。

これ見よがしの自殺が惨めなのは、「これ見よがし」にはまったくならないからである。

ひとは、直ぐに忘れる。

何事もなかったかになる。

3.2.3 作品終結

生物は、《<わたし>を残す》を自己目的化した存在である。
人間もこれである。
これ以上でも以下でもない。

生物一般の《<わたし>を残す》は生殖だが、人間はこれに<作品>を加えた。
そして<作品>を加えることで、年をとっても現役でいることが可能になった。

一方、年寄りの「現役でいる」は、たいてい勘違いである。
そして年をとるとは、この勘違いに気づけなくなることである。
そしていまの時代、年をとるとはどこまでも長生きすることであり、そしてこれは痴呆化することである。
ここに、「いい加減のところ死ぬ」がひとの課題になってくる。

ひとは「いい加減のところ死ぬ」の「死」を、<迎える>の相で想う。
しかし、死は不意に来る。
そこで、死が不意に来てもよいようにしておくことを考える。
こうして「常住死身」が課題になる。

「常住死身」は、煩悩を無くせた状態である。
煩悩は、《<わたし>を残す》——<作品>——である。
よって、「常住死身」は、作品を終結できた状態である。

「無我」だの「我執を捨てる」だのは、空論である。
繰り返すが、生物は《<わたし>を残す》を自己目的化した存在であり、人間もこれである。
かくして、「常住死身」の形は「作品の終結」であるのみ。

そこで、「しかし作品の終結はあるのか？」という問題になる。
ここに、年寄りの<弱る>が効いてくるのである。
弱ることによって、作品はやっても堂々巡りの^{てい}体になる。
この堂々巡りを見て、もういいか—— "No more than this" ——となるわけである。

翻って、堂々巡りに気づけることが肝心になる。
痴呆化に先に行かれてしまうと、これが成らなくなる。
よって、作品を終結させる作業はのんびりできないものになる。
これが「常住死心」の実践形である。

3.3 自決死

3.3.1 自然死

3.3.2 「自決死」

3.3.3 往生道

3.3.1 自然死

「延命」は、「自然死を却ける」である。

よって「延命を払ばない」は、「自然死を払ぶ」である。

死は、生命維持機能の停止である。

翻って、この機能停止を阻むのが「延命」である。

この機能停止の予兆を捉え、機能停止の要因を除こうとするのが「予防」である。

予防知識は、生活空間を予防仕様につくらせる。

延命技術は、危険な状態に陥った命をもちこたえさせ、そこそこの回復にまで至らせる。

予防知識と延命技術は、これをもつ生き物は人間だけというものではない。

生物の<生きる>には、予防知識と延命技術の所持が含意されている。よって、「自然死を払ぶ」の「自然」は、意味の漠然としたものである。実際ここで「自然」のことばを用いるのは、いまの人社会の「延命」が度外れていることを強調するためである。

生命維持機能の停止の原因は、いろいろである。

これを大まかにつぎのように分けておく：

- a. 生体プログラム
- b. 内部構造的

- c. 閾値超え
- d. 他の生物の餌食
- e. 破壊
 - e1 物理的破壊
 - e2 化学的破壊

盛年過ぎの衰えには抗えない。これは a である。

脳溢血とか心不全は、b である。

熱中症・低体温症とか餓死は、c である。

インフルエンザは、d である。

自動車事故は、e1 である。

一酸化炭素中毒は、e2 である。

「癌」は、独特なものがある。

a のように見えるし、b とも思われる。

「ウィルス性癌」というものの存在が確かなら、d もある。

「自然死を択ぶ」とは、これらに抗わない——「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候 死ぬる時節には死ぬがよく候」の体で——ということである。

老人の「孤独死」は、不可抗力的に「自然死を択ぶ」になった場合である。

3.3.2 「自決死」

延命を却けた場合の死を、「自決死」の言い回しでここに主題化する。「決」は、「<延命しない>を決める」の「決」である。

延命を却けるとは、医療・介護を却けるということである。

年寄りの場合、医療・介護は「麻薬」と同じになる。

一旦これに手を出すと抜けられなくなり、廃人化していく。

医療・介護が善で麻薬が悪であるのは、高々依存者の多寡の差である。

依存者が多ければ、これを是としなければならない。

しかもそこから大きな産業が生まれるのであれば、なおさらである。

「自決死」は、つぎの段階論になる：

1. 常住死身をつくる
2. 自然死を俟つ

「自決死」は、常住死身が要点である。

これが成っていないと、「延命しない」にはならない。

「常住死身をまだつくっていないので、ここは一旦延命しておこう」になってしまう。

「自然死を俟つ」の<俟つ>は、微妙である。

ここでは、時間が要点になる。

死は一瞬ではなく進行である。そしてこれは、衰弱の進行である進行時間の長いものは、介護の手にかかってしまう。

3.3.3 往生道

「延命を却ける」の体は、《常住死身で自然死を俟つ》である。
 ここで、「自然死を俟つ」の〈俟つ〉は、微妙である。
 死は一瞬ではなく進行であり、そしてこれは衰弱の進行である。
 ここに延命が介入してくる。

そこで「延命を却ける」は、〈いつでも死ねる〉が要ることになる。

〈いつでも死ねる〉の主題化は、微妙である。
 これは「往生道」の主題化だというように定めないと、常住死身の理念を壊すことになる。

「道」とは、^{かた}形を課題に立てこれの究極をゴールにした探求コースを謂う。

〈いつでも死ねる〉の死は、自然死でないと論が立たない。
 自殺の手法を用いるのは、「自殺」に括られる。
 「自決死」ではない。

インディアンの酋長だか長老だかが、「今日は自分が死ぬ日だ、死んでくる」と言って出かける。
 そして帰って来て言うに、「どうも今日は、その日ではなかったようだ」。
 ズッコケ話なのだが、自決死とはこのような趣きの死をいう。
 自分は無為であり、自然が自分を眠りに落とし、そしてこの眠りで死ぬ、
 というわけである。

3.4 備考：西部邁「自裁」

3.4.1 「自裁」テキスト

3.4.2 対比「自裁」

3.4.1 「自裁」テキスト

西部邁 (2018), pp.85-87.

この老人、齢経るにつれ、アンドレ・マルロー（がその嚆矢とされている）流儀のアクティヴ・ニヒリズム（活動的虚無主義）には意義を見出せないようになっていた。

若い折に、アクション（活動）を反政府・反日共の一点に絞るといふ事態の成り行きの中なかで、若き日のマルローに代表される「既成の価値をすべて疑いつつ極端な行動に走る」ことを好んでいた。

その繋がりではヒットラーの『我が闘争』をすら受け入れていた。そんな自分の姿を、この老人はのちに深く自省することとなったのである。

簡略に言えば、活動の目標が複数個あるとき、そのあいだで選択するための規準は、自分ら生者の乏しい経験と知能に拠る前に、死者たちの残しているはずの伝統に求めよ、というところからこの男の保守思想が始まったわけで、それと同時に、ニヒリズムは峻拒さるべきとみなされた。

活動的虚無とて生の墮落の防波堤にはなりえないのみならず、基準としての伝統が指し示すのは「葛藤のなかにある諸目標のあいだの平衡」ということなのである。

だが、年老いて、身動きが不自由になり、下手すると身の回りの者たちの介護を受ける破目になるかもしれないと予想され、論述のテーマも出尽くし、さらに論述が空転することが多

くなる段階に入ったと自覚されるような生にあっては、活動目標は「いかに死ぬか」の一点に絞られてくる。

その方法についても選択肢の幅があることは確かだが、それはもう（価値観とは関係なく）単に技術的な次元にあるだけのことで、最も簡便な死に方つまりシンプル・デス（簡便死）が最善となるに違いないのだ。

そしてそこでなら、あの懐かしい活動的虚無が甦る。

つまりおのれの活動歴の最後にして唯一の一駒として「死の決行」を生きいきとなせるといふことになる。

今、自分の人生の過ぎ越し方を概観し終えて、この男、「こういう経緯を辿るのが自分の運命だったのであろう」という以外のことをいえない気分である。

いろいろなことを思索し思考し様々なことを試験し実践しはしてみたが、総じていえば、「何ということもなかった平凡な人生」だったといったほうがよいのであろう。

死活に「近い」局面がいくつかあり、必死に「近い」気持ちでそれらに立ち向かってみはしたものの、そのすべてが「平和と民主」や「進歩とヒューマニズム」の凡庸にして退屈な時代におけるちょっとした逸脱であり、ちっぽけな波紋を自分の周囲にほんの暫し生じさせる類の些事にすぎなかった、と省みるしかない。

富岡幸一郎「自死について」, in 西部邁 (2018), pp.175,176.

本書第一部の「死の意義」「死の選択」「死の意味」は、西部邁が五十五歳のときに上梓した『死生論』からとっているが、

これは戦後の日本といういびつな「太平の世」に差し向けられた現代の『葉隠』なのである。

『葉隠』は、江戸の前期（享保元年）にすでに武士が戦から遠ざかり太平の時代を生きなければならなくなったとき、その「生き方」の指南を鍋島藩士・山本常朝が語った尚武思想の本である。『葉隠』はまさに「死に方」がわからなくなった時代に「死」の意識を想起させることで、いかに生くべきかを説いたのである。

《武士道といふは、死ぬ事と見附けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬはうに片づくばかりなり。……毎朝毎夕、改めては死に改めては死に、常住死身しにみになりて居る時は、武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果すべきなり》

つねに死を心に当てて、万一のときは死ぬことを選べば間違いはない、死ぬべきときに死なないのはよろしくないとの行動哲学である。実は、山本常朝その人は六十一歳の長寿で置の上で死ぬのであるが、彼が説いているのは武士の決断であり、「常住死身」になることによる「生き方」の作法である。

『葉隠』を座右の書としてきたという三島由紀夫は『葉隠入門』でこのようにいっている。

《……『葉隠』はそういう太平の世相に対して、死という劇薬の調合を試みたものであった。この薬は、かつて戦国時代には、日常茶飯のうちに乱用されていたものであるが、廃兵の時代となると、それは劇薬としておそれられ、はばかられていた。山本常朝の着目は、その劇薬の中に

人間の精神の病いからいやすところの、有効な薬効を見いだしたことである。》

引用文献

西部邁 (2018) : 西部邁 [著], 富岡幸一郎 [編著] 『自死について』, アーツアンドクラフツ, 2018.

3.4.2 対比「自裁」

本論考の「自決死」立論は、西部邁「自裁」との差別化が要点になる。

思想する者は、自分の思想を自分にしてしまう。

自分の思想を自分にしてしまうと、主義貫徹の死が死に方として択ぶものになる。

表現者は、自分の死も表現にしようとする。

主義貫徹の死を死に方として択んだら、自分のその死をひとが別様に解釈しないよう、前もってアピールする。

この公言には、ブれないための縛りという機能もある。

実際、これに縛られるようになる。

「自裁」はこれである。

主義は人間種のものである。

他の生物にはない。

「自決死」は、生物一般の死であろうとするものである。

「今日は自分が死ぬ日だ、死んでくるとするか」が、「自決死」である。

「どうも今日は、その日ではなかったようだ」になり得るものである。

「延命を却ける」は、主義ではない。

「痴呆で生かされたくない」の自然な思いである。

「常住死身」は主義ではない。

「自決死」が成るための必要条件である。

「痴呆で生かされたくない」は、「常住死身」があって言えることである。

4 閉じ

おわりに

おわりに

延命オリエンテーションに対しては、馴染める者と馴染めない者の別が現れる。

延命オリエンテーションは、正義のオリエンテーションである。

これに馴染める者は、善人である。

翻って、馴染めない者は悪人である。

実際、「延命を却ける」論をひとが憚るのは、悪の理だからである。

善人は、延命オリエンテーションをそのまま自分の立場にすればよい。

悪人は、自分の構えの独自構築を課題とせねばならない。

本論考は悪人に寄せてつくったものであり、善人には関係のないものである。

本論考が読者に想定したのは、悪人であった。

ここに「悪人正機」のことばが浮かぶ。

実際本論考が主題化しようとしたもの、それは「正機」であった。

本論考は、〈往生＝自決死〉の形を導いたところで閉じる。

中途半端の体だが、これ以上は嫌味になるからである。

そしてこの中途半端の先は、どうせ論理作業である。

"uniquely determined" というわけである。

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年, 北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て北海道教育大学教育学部教授 (数学教育専門), 2015年退職。

註：本論考は, つぎのサイトで継続される (この進行に応じて本書を適宜更新する) :

<http://m-ac.jp/thought/death/>

自決死

2019-07-04 初版アップロード (サーバー : m-ac.jp)

著者・サーバ運営者 宮下英明

サーバ m-ac.jp

<http://m-ac.jp/>

m@m-ac.jp
